

今週の為替相場見通し(2024年9月17日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		140.29 ~ 143.80	140.84	137.00 ~ 143.00
ユーロ	(ドル)		1.1002 ~ 1.1102	1.1076	1.0950 ~ 1.1250
(1ユーロ=)	(円)		155.48 ~ 158.73	156.03	152.00 ~ 160.00
英ポンド	(ドル)		1.3003 ~ 1.3158	1.3125	1.2800 ~ 1.3400
(1英ポンド=)	(円)	*	183.72 ~ 188.13	184.84	177.00 ~ 189.00
豪ドル	(ドル)		0.6622 ~ 0.6733	0.6705	0.6650 ~ 0.6900
(1豪ドル=)	(円)	*	93.59 ~ 95.71	94.42	93.00 ~ 98.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 鈴木 智大

(1) 今週の予想レンジ: 137.00 ~ 143.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

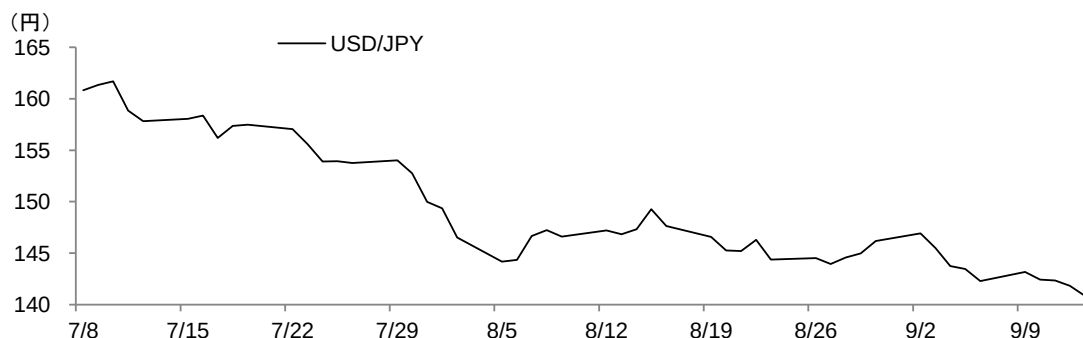
週初9日のドル/円は142.48円でオープン後、じりじりと値を上げる展開。欧州時間には一時143.80円まで上昇したものの、一服すると142円台後半まで押し返されるなど上値の重さが意識される値動きとなった。10日はめばしい材料はなかったが、143円台半ばでは引き続き上値重く推移する中、原油安や米金利低下など、リスクオフムードの高まりを受けた円買いに142円台前半まで値を下げた。11日は米大統領候補のテレビ討論会や中川日銀審議委員の発言を受けて、140円台後半まで下落し、その後値を戻すなど荒い値動き。注目された米8月消費者物価指数(CPI)は、コアCPI(前月比)が予想を上回ったことを受け、発表直後はドル買いで反応も、142円台半ばまでの上昇に留まるなど持続性はなかった。12日は日本株の大幅上昇を受け、序盤は堅調な推移。田村日銀審議委員の発言を受けた下落をこなした後は、143円を回復するも上値は重く、米新規失業保険申請件数の悪化や米大手紙記者の情報発信を受け、141円台後半まで反落した。13日は前日の流れを引き継いで140円台前半まで値を落とすも、勢いは続かず。140円台後半まで値を戻して越週した。週明け16日は、東京を含めアジア各国が休日で薄商いの中、ドル売りの流れに押され140円を割れると、139.58円まで下値を更新。米経済指標の結果にやや反発するも総じて上値は重く、140.62円でクローズした。

今週は軟調な推移になることを予想。最大の注目となるFOMCは、政策金利の引き下げがコンセンサス。インフレや雇用関連の経済指標に方向性を決定づけるものではなく、利下げ幅についての不透明感に残存している状況ではあるが、▲25bp、▲50bpどちらの利下げになろうとも、他国に遅ればせながら緩和を開始したという事実が少なからずドル売りを誘発する材料となりそうだ。また同時に発表されるドットチャートで、金融市場が織り込む、長期的な目線を含めた利下げパスと当局者との考えの差異が、値動きに影響を及ぼす可能性がある点には注意をしておきたい。一方日銀金融政策決定会合は、政策金利の据え置きがほぼ確実視されている中、会合後の植田日銀総裁の会見内容に注目。物価見通しの達成という前提条件は強調されているものの、中川審議委員、田村審議委員と、今後の利上げについてポジティブな姿勢を感じさせる内容が立て続けに発信されている。実質賃金が2か月連続でプラスとなるなど、更なる緩和調整の後押しとなる材料も徐々に揃い始めている中、植田総裁からも同様のスタンスが示されることが十分想定され、追加利上げ観測の再燃が円買いの流れを強め、ドル/円下押しの大きな要因になると考えている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/9~9/13)の値動き:

安値 140.29 円 高値 143.80 円 終値 140.84 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替デリバティブチーム 岩下 義明

(1) 今週の予想レンジ: 1.0950 ~ 1.1250 152.00 ~ 160.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは米国材料で売られたのち、ECBが予想対比タカ派で戻され往って来いの展開。9日、東京時間のユーロ/ドルは1.1090付近でスタート。米金利の上昇を受け、じり安での推移。ロンドン時間午後は独金利の低下に伴った売りが優勢となり、そのまま1.1030付近でクローズ。10日、ロンドン時間午後は欧州株安の展開が重しとなり、1.1016まで売られ、軟調に推移し、1.1020でクローズ。11日、東京時間のユーロ/ドルは米大統領選討論会の内容を受けたドル売りの展開となり、じり高で推移。NY午前中に発表された米8月コア消費者物価指数(CPI、前月比)が予想を上回り、ドル買い地合いが重しとなり、一時週安値となる1.1002まで下落。その後はやや反発し、1.1010付近でクローズ。12日、ロンドン時間にECB理事会が主要政策金利を▲25bp引き下げる事を決定し、同時に発表された声明文では24年と25年のコアインフレがそれぞれ上方修正された。その後に行われたラガルドECB総裁の記者会見では、「ユーロ圏の経済活動は依然として低迷している」との認識を示す一方、「インフレ率は今年後半に再び上昇すると予想される」等予想対比タカ派の発言から買いが優勢となり、その後のNY午後のドル売り地合いも一段のサポートとなり、1.1074でクローズ。13日、米金利低下と9月FOMCにおける▲50bpの利下げ期待によりドル安が進み、一時週高値となる1.1102を付けるも、その後は戻され、1.1080付近で越週。

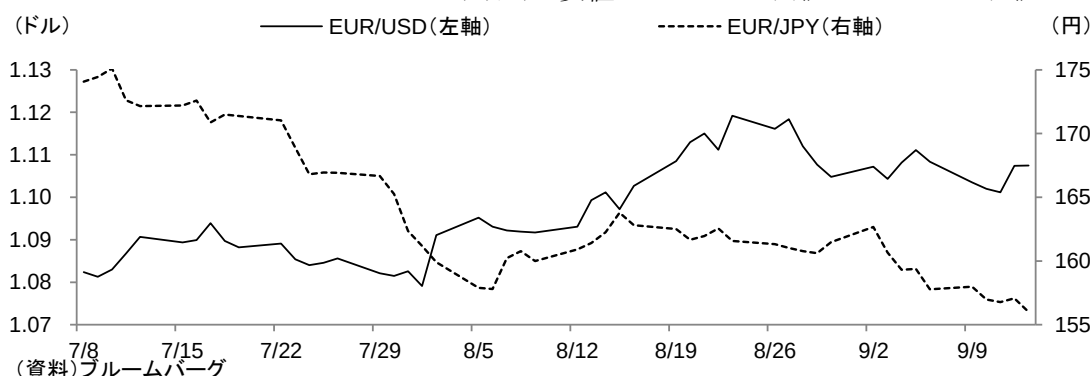
今週のユーロはボラタイルな展開を予想。今週は17日(火)に米8月小売売上高、18日(水)にユーロ圏8月消費者物価指数(HICP、確報)、17日(火)～18日(水)にFOMCが予定されている。最大の注目はやはりFOMCであるが、現状市場織り込みが▲25bpと▲50bp半々である以上、どちらにせよ値動きの荒い展開が予想される。▲25bpとなれば一度に▲50bpの大幅利下げは厳しいと受け止められることから年内利下げ織り込みの剥落によりドル高が進み、▲50bpとなれば今後のさらなる利下げが予想されドル安が進むと予想する。仮に▲50bp利下げとなればグローバルな景気後退懸念からドル安に加えてユーロ安になる可能性もあり、市場がどこまで景気悪化を警戒しているのか反応を見極める必要があると思われる。また、先週のECBでコアインフレが上方修正されていたが、見方を変えれば今後インフレが予想対比上振れる余地が少なくなることであり、今後は利下げ予想加速からのユーロ安圧力が強まっていくシナリオを頭に入れておきたい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/9～9/13)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1002 高値 1.1102 終値 1.1076

(対円) 安値 155.48 高値 158.73 終値 156.03



3. 英ポンド

欧州資金部 天沼 幹

(1) 今週の予想レンジ: 1.2800 ~ 1.3400 177.00 ~ 189.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

過去1週間のポンド相場は、対ドルで下に往って来いではほぼ変わらずだった。週初は、前週の雇用統計とブラックアウト期間前のウォラーFRB理事らによる▲25bp利下げ観測を強く印象付ける発言を受けて下落していた米金利が反発し、全面的なドル高で推移。10日は翌日に米8月消費者物価指数(CPI)の公表を控え様子見ムードの中、英7月雇用統計が発表され、2年ぶりの低水準の成長となるが、翌週9月会合での利下げが織り込まれることもなく市場への影響は限定的だった。明けて11日、英7月GDPが前月比横ばいで市場予想を下回り、また下半期の成長鈍化の見通しとなったことから景気回復が失速する見方となり、年後半の英利下げ見通しが強まった。その後、米8月CPIはヘッドラインで予想通り、コアで市場予想を上回る結果となり、残存していた▲50bp利下げの織り込みのポジションが大幅に剥落しドル全面高。ポンドは対ドルで大きく下落した。しかし12日になると、米WSJのニック・ティミラオス氏がFOMCでの利下げ幅をめぐる記事を公表したことで、大きく後退していた▲50bpの利下げ織り込みが復活し、反転ドル全面安となる。ポンドは米8月CPI後のドル高を打ち消し余りある勢いで反発し、底堅く推移した。13日は特段のニュースなく方向感なく推移した。

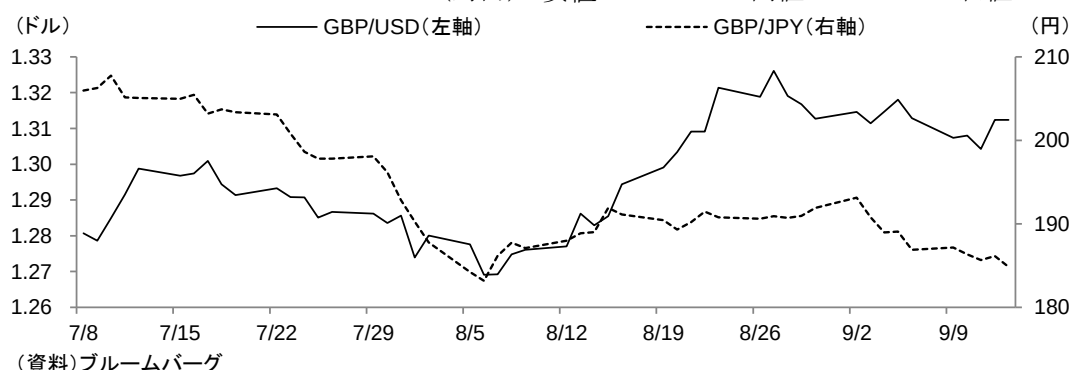
今週は、FOMCや英8月CPIを控え、不透明感が強い。FOMCの利下げ幅については、前述のとおりOIS市場での織り込みが激しく上下している。仮に▲50bpの利下げとなった場合には織り込み不足でドル売りとなろうが、その場合、今後の利下げ回数や終着点に注目したい。直近の経済指標が明確にリセッションを示すものではなかったことを考えれば、先んじて大幅利下げを行う場合でも、次回11月にも続けて大幅利下げを行うような過剰な織り込みはけん制されるはずだ。また▲25bpの利下げとなった場合でも、見通しにおいて11月における大幅利下げの可能性がより意識されればドル安に傾く可能性も高い。一方、英国の経済指標では、18日(水)に英8月CPIの公表、そして翌19日(木)にBOEの金融政策決定会合が控えている。足許のインフレ圧力に注目が集まるが、市場予想通りサービスを中心に引き続きインフレ圧力が根強いことを再確認する結果となれば、政策金利も据え置きとなろう。ただし、直近の英7月雇用統計や英7月GDPは弱含む結果となっており、年後半における景気失速と利下げ織り込みが強まる傾向にある。見通しについて年後半の利下げペースが早まるなどハト派に傾く場合、ポンドが明確に売られる局面も想定できよう。対円では、19(木)~20日(金)の日本銀行の金融政策決定会合が最大の焦点となる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/9~9/13)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3003 高値 1.3158 終値 1.3125

(対円) 安値 183.72 高値 188.13 終値 184.84



4. 豪ドル

金融市場部 為替デリバティブチーム 部坂 洋太郎

(1) 今週の予想レンジ: 0.6650 ~ 0.6900 93.00 ~ 98.00 円

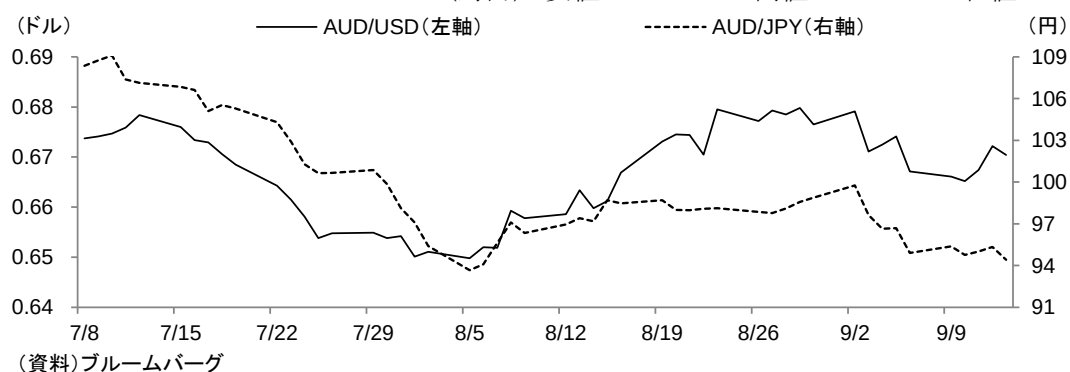
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は上昇となった。週初9日、0.6670付近で取引開始された後、実需フローと見られる豪ドル買いにより0.6688まで上昇となったが、その後は値を戻し0.6660付近で引けとなった。10日、豪ドルは翌日の米8月消費者物価指数(CPI)の発表を控えて狭いレンジで方向感のない値動きとなったが、米国時間に原油価格が大きく下落したことで豪ドルも上値の重い展開となり一時0.6642まで下落となったが、引けにかけては値を戻して0.66台半ばで引け。11日、豪ドルは米国時間に発表された米8月CPIの結果を受けて、発表直後に一時週安値である0.6622まで下落したのちに、米国株が上昇に転じると豪ドルも持ち直し0.6676まで値を戻して引けとなった。12日、豪ドルはアジア・オセアニア時間から小高く推移。米国時間に米株が上昇する動きや原油をはじめとする資源高を受けて0.6725まで上昇となって引け。13日、豪ドルは9月FOMCにおける▲50bp利下げの可能性が高まったことを受けてドルは軟調推移。ただし、米国時間に発表された米9月ミシガン大学調査(速報)の期待インフレ率が事前予想を上回ったことでドルに買い戻しが入り、0.6705で越週した。

今週の豪ドルは先週に引き続き上昇を予想する。今週の主な経済イベントとしては17日(火)に米8月小売売上高、17(火)～18日(水)に米FOMC、19日(木)に豪8月雇用統計が予定されている。FOMCについては、▲25bpもしくは▲50bpの利下げ予想については市場の予想も割れている状況下、発表当日まで様子見の姿勢が強まると予想される。また、19日(木)は豪8月雇用統計を控えており、来週24日(火)に開催予定であるRBA会合で引き続きのタカ派スタンスを継続できる材料となるかどうか注目となる。今後の見通しについては、少なくとも18日の米FOMCにて▲25bp以上の利下げが確実視されている中で、米豪金融政策方針の違いが顕著となり、豪ドル相場は上値を切り上げる展開となるのではないかと。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/9～9/13)の値動き: (対ドル) 安値 0.6622 高値 0.6733 終値 0.6705
(対円) 安値 93.59 高値 95.71 終値 94.42



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。